



TITLE:

<批評・紹介>西域史研究(上・下巻)  
白鳥庫吉著

AUTHOR(S):

岡崎, 精郎

---

CITATION:

岡崎, 精郎. <批評・紹介>西域史研究(上・下巻) 白鳥庫吉著. 東洋史研究 1945, 9(3): 190-192

ISSUE DATE:

1945-11-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/145823>

RIGHT:

於いて先生が、新出の龜甲文字や銅器銘文などの資料を驅使し、考證學的方法と先生獨特の史眼で傳説時代の支那再確認に非常な自信と興味とを持たれたことは事實である。富永仲基の佛教史研究法に共鳴して支那古代傳説の加上を論じ、年代的五帝を空間的五帝に還元せしめられた所などは動かすべからざる鐵案であり、今後の支那古代史研究の出発點とせねばならぬであらう。

清朝史通論は近世史である上に、一際強く先生のポリチイクが現はれてゐる。ポリチイクは兎角上辺りに流れたり、學問と分裂したりしたがるものであるが、先生のそれは、此處が經世の論だと別にことわらないでも隨所にそれが滲み出てゐる。ある會社の重役が毎日資治通鑑を一巻づつ讀むといふ話を聞いて先生が、それは偉い、全篇の參考に出来るやうなのが本當の通鑑の讀み方だと賞められたことを覚えてゐる。先生のこの言も、讀み様によつては、學者以外の人にも經世處身の虎の巻になるかも知れない。

先生は度々支那へも行かれ、清國學者との交際も廣く、又藏書にも富んで居られたので、清朝史通論に盛られた材料は恐ろしく豊富であり、それが殆ど皆先生の手許にあるか又は實地に目過されたものに係つてゐる。特に清代の書牘などを多く觀られた點では、恐らく先生は當時の日本に於いて一二を爭ふであらう。音韻學だの考勘學だの、さては文章詞曲など、取りつき憎い難問題が一度先生の手に掛ると平易に噛み

碎いて明快な説明が與へられてゐる。文化史的な内容が大部分を占めてゐるから、寧ろ清代文化史と云つてよいかも知れぬが、抑も歴史と云ふものが別に文化史と名乗らぬでも、斯ういふ風にするのが本當だとも云へる。先生の書は、何時置ても、今書いたばかりかと思はれる清新さがあり、更に色々なことを考へさせる不思議な力を持つてゐる。(宮崎市定)

## 西域史研究(上・下卷)。

白鳥庫吉著

昭和十六年九月・同十九年四月

岩波書店刊行 A5版通計一五〇五頁

明治以後に於ける本邦史學史を顧るに、西域史研究も亦、新學問の一たるを失はない。而してこの新科學の創始者こそ白鳥庫吉博士にして、博士の最も得意とせらるる部門であり、殊に其の初期にありては博士以外には殆んど企て得ざりしものであつた。尤も當時に於いても博士以外に西域史研究に携りし人々は皆無ではなく、那珂通世博士・三宅米吉博士等の諸業績を逸することは出来ないけれど、眞の意味に於ける西域史研究は實に白鳥博士を以て其の權輿とせねばならぬ。

博士の西域史研究途上に於ける最初の論文は「鳥孫に就いての考」(明治三十三年、史學雜誌十一編十一號、十二

編一・二號)にして、今回、本も上巻の冒頭に掲げられたのは其の當を得たものであらう。次いで博士は外國留學より歸朝後、大秦國に關する新見解「大秦國及び拂菻國に就きて」(史學雜誌十五編四十一號、本書下卷所收)を提出されて Friedrich Hirth の所説 (China and the Roman Orient) を批判せられ、引續いて西域史研究に潛心せられたる結果、物されたのが明治四十四年より大正二年に亘り東洋學報(一卷三號、二卷一號、三卷一・二號)に連載されし「西域史上の新研究」(本書上卷所收)に他ならぬ。西域史學の開拓者としての博士の意氣の程は本篇の序文にも窺ひ得るが、其中、「康居考」に於いては漢代の康居がキルギス・ステツプを指すものにして、西人の説く如く Sogdiana の地を指すものに非ざることを指摘され、大月氏五翕侯の位置・疆域を中心に論ぜられし「太月氏考」にては Margart の所論に批判を加へられたのである。更に大正五年より引續いて研究成果の發表を見た。先づ、「大宛國考」(大正五年二月、東洋學報六卷一號、本書上卷所收)は、主として漢代の大宛、殊に其の都城貴山城の位置を論じて Knoke 比定説を排せられ、(之は桑原鵬藏博士との間に熾烈なる論戰を展開されることとなつた。桑原博士「東西交通史論叢」(參照)大宛の名義に就いて音譯説を唱へられ、翌六年一月發表せられも「歸賓國考」(東洋學報七卷一號、本書上卷所收)に於いては、漢代の歸賓即 Kashmir 説 (Ed. Chravanes, S. Lévi) を

批判して、其の實は Gandhara 地方を指すものなることを論證せられたが、更に同年九月より翌々年に亘つて公けにされし「塞民族考」(東洋學報七卷三號、八卷三號、九卷三號、本書上卷所收)にては、西方史料 (Herodotus 及び Belsham 碑文以來の) 日見のサカ族と漢代史料に見える塞種との關係を詳論されたのである。本書上卷には以上の他に猶、「大宛國の汗血馬」(明治三十九年八月、東亞之光一卷四號)「佛教東漸の傳説」(昭和十年五月、「佛教講話」所收)を收めてゐる。

本書下巻の排列は「ブトレマイオスに見えたる葱嶺通過路に就いて」(昭和十六年四月、蒙古學報第二號)「粟特國考」(大正十三年十二月、東洋學報十四卷四號)の中亞研究二篇を冒頭に掲げたる後、「大秦國及び拂菻國に就きて」(前述)「條支國考」(大正十五年五月、「内藤博士還曆祝賀支那學論叢」所收)・「大秦傳に現はれたる支那思想」(昭和六年一月「桑原博士還曆記念東洋史論叢」所收)・「大秦傳より見たる西域の地理」(昭和六年四月・八月、史學雜誌四二編四・五・六・八號)・「拂菻問題の新解釋」(昭和六年十二月・七年七月、東洋學報十九卷三號・二〇卷一號)・「大秦の木難珠と印度の如意珠」(昭和八年八月、「市村博士古稀記念東洋史論叢」所收)など西亞關係の諸研究六篇を載せてゐる。「粟特國考」は久しく難問たりしこの國の所在を考へられた結果、それが後漢書の渠犂(渠犂)にして南北朝の昭武九(六)姓

諸國、隋唐の康・米・曹・安・史・何などソグデアナ諸國を包含し、佛典の窣利國に當ることを證せられたるもの。

「條支國考」にては條支國がチグリス、ユーフラテス兩河のデルタを本地とする *Mesene-Karna cene* 國にして、條支の字面はメソポタミヤの指稱たるセミチック語デエジラの音譯なることを説かれた。昭和六年、史學雜誌に連載せられし「大秦傳より見たる西域の地理」においては大秦傳所記の地理を考證され、最後に條支國と大秦國に關する記事の再檢討を試みられた結果、條支は Antiochia の略譯と解せられて前説を改訂せられたのである。(なほ條支の地は宮崎市定教授により Syria, Seleucia に比定されて居り—史林二四卷一號所載「條支と大秦と西海」、夙に小川琢治博士は「支那歴史地理研究初集」第十二章「歴史地理の地名學的研究」に於いて、條支を Antiochia の音譯として Syria に比定されてゐる)「大秦傳に現れたる支那思想」は大秦傳の成立と漢代思想との關聯を論ぜられて、大秦の文字解釋に及ばれしもの、考古の上に示唆せらるゝ所多い。「拂菻問題の新解釋」は上・中・下三篇より成るが、本卷に收むる所は上・中兩篇であり、本年一月發行の東洋學報二九卷三・四合冊號に載せられた下篇を以て完結するのである。魏書大秦傳の批判に始りし本論文は、拂菻國號の解釋より進んで魏書の伏盧尼國が隋唐時代の拂菻國にして、其の都城伏盧尼城は Antiochia なりと比定せられたに續けて、隋唐時代の拂菻國、南朝の記錄所見の拂

國の檢討に及ばれてゐる。本論文に於いては、嘗て B. Leiser に依つて問題とされし水羊傳説は更に一段と解釋を深められてゐるのであつて、民俗學的研究としても極めて卓れたものとせねばならない。博士の民俗學的方法是西域史研究に於いては更に「大秦の木難珠と印度の如意珠」を見るに至つた。即ち、通典大秦國條所見の木難珠を取上げられ、同書同條の内容の分析解釋を行はれた後、木難珠の實體を究められ、更に寶珠説話の問題へと進まれる。印度の如意珠も檢討の對象となるのであり、更には作答石・婆薩石の靈驗・石信仰の問題に及ばれたのである。(なほ博士には「岩石信仰の起源」民族學研究二卷二號がある)

以上、本書上下兩卷に收められし諸論文は博士の西域史研究の成果を悉く網羅したものでないが、其の主要なるものは茲に集められたと云つて宜い。更に上卷に於いては、後出論文にて前出論文の所説を改められし場合、前出論文の該當條下に其事の註記がなされてゐるのは、編纂者各位の御發案になるものとして推すべきであるが、豫定せられし附圖索引の附せられなかつたのは—現下のこととして止むを得ぬとは云ひ乍ら—誠に遺憾事であり、何等かの形で補はれ、以て本書を完璧のものたしめられんことを期待したい。博士の西域史研究の諸業績に就いては今更乍ら讃うるに其の辭を得ないのであるが、最後に、博士の東洋史論集の編纂に携はれる方方の御努力に敬意を表して筆を措く。(岡崎精郎)